アドミラとシェリスカ。～フタリノデアイ～

キサラギハルカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
アドミラとシェリスカ。～フタリノデアイ～

【Ｎコード】
Ｎ１１６０Ｑ

【作者名】
キサラギハルカ

【あらすじ】
家政婦のアドミラ。変人魔法使いのシェリスカ。
二人の出会いの話。
「眠りの国の王子と魔女」からずっと遠い未来の話です。

私が彼に出会う前

「ねえ、アドミラ」
半年ぶりぐらいに作った、アップルパイを夕食後にほおばりながらシェリが私を見た。
ちなみにアップルパイはシェリの大好物のひとつでもある。
私のほうはというと、好きでも嫌いでもない。私が好きなのはチーズケーキである。
「何でしょうか？」
「来週の木曜日は君と僕の誕生日だよね」
「ええ。偶然にも」
シェリはにっこりと笑った。
そう。どういう偶然か、シェリの誕生日と私の誕生日は同じ日なのだ。１１月の１５日。
「去年の誕生日はええと・・・僕が仕事で君は一人だったんだよね」
「そうでしたっけ？」
残念ながら私の記憶にはない。
「そうだよ。だから、今年は仕事を入れない。うっかりなんてことも絶対にしない」
「別に私は平気ですが？」
一人なんてことは珍しくない。シェリが仕事に行ってご飯を一人で食べるなんてことは。私は子どもではないのだから。
「誕生日のケーキを一人で食べるのって寂しいじゃないか」
・・・ああ、シェリ。
「君だって平気でも、本当は平気じゃないはずだよ」
それは、わからないだろうあなたには。
「・・・まあ、ケーキはちゃんと作ります。チョコレートケーキを焼きますから」
少しの沈黙の意味を、シェリがわかったのかどうかはわからなか

った。
「うん」
またにっこり笑って二つ目のアップルパイに手を出した様子を見て、彼はわかっていないのだろうと私は思うことにした。

私の名前はアドミラ。
シェリスカ・エイドワース・ブラン・シェルサードという今時妙に長い名前を持つ、自称２８０歳・見た目は２０代後半の変人魔法使いに雇われている家政婦である。家政婦というと、昔はメイドのような格好が主流だったが、今ではシャツにエプロン、パンツスタイルというのが一般的である。メイド服を持っていないわけではないが、滅多に着ることはないので今はクローゼットの中に眠らせている。
「アドミラ」
「何でしょう？」
私は、フローリングを掃いていた箒の動きを止めると、アップルパイを食べ終えた後、白いローブの上に灰色のロングコートを着て部屋から出てきたシェリを見上げた。いつもぼさぼさの金髪の髪は、珍しく整っている。ただし、青い目は少し眠たそうだった。
シェリと私との身長差は大体りんご一個分くらいである。見上げるのにそれほど苦にならないベストな身長差といったところだろうか。
「ちょっと出かけてくる」
「いってらっしゃい」
「うん」
パタン、とドアが開いて閉まった。
私は掃除を再開した。

「ふう・・・」
シェリの部屋を除いて、家の掃除が終わった。
シェリの部屋については、ここで雇われた最初のときから掃除をしていない。入ることも禁止されているためだ。
「休憩しよっと」
私は椅子に座った。テーブルの上のポットとティーカップを引き寄せてお茶を入れる。
お茶を入れたティーカップを持ちあげたところで、カレンダーに目が止まった。さっき、誕生日の話題になったせいか、１１月１５日に目が止まる。
「そういえば・・・」
その前日の１４日は。
「雇われた日だ」
私が、シェリに初めて出会った日。
――――――こういう人もいると知った日。

２年前。
その年の１１月は、月の初めからひどく寒い日が続いていた。
私は、１０月の終わりにそれまで勤めていた職場を解雇されてしまい、毎日のように職業案内所を訪れていた。
「うーん」
仕事をする気があるのかないのか、（たぶん前者のほうだと思う）私の担当になっている男性職員は太い黒縁眼鏡を外したりつけたりしながら、すでに目を通し終えているはずの履歴書をまだ眺めている。
「仕事が欲しいんです」
この台詞、１１月の初めからの分を合計すると、もうきっと５０回くらいは言っているはずだ。

「アドミラさん」
「はい」
職員は手元の履歴書をくるりと一回転させると、私のほうへ滑らせて言った。
「残念ですけど、あなたに紹介できる仕事がない」
至極残念そうな表情を浮かべてみせた職員に、私はあっさりと返した。
「ここに来た日から言われてます」
「確かに。言っているのは私だからな」
職員は眼鏡を外すと今度はレンズを磨き始めた。
「私としても非常に心苦しいんだ。しかし、この不況だ。アドミラさん、あなた一人だけではないんですよ。辛い立場にいるのは」
そう言う職員の口調はちっとも残念そうではなかった。
正直いらっとするものを感じたが、ここで何か言ったってこの状況がどうにかなるとは思えない。
「・・・わかりました」
私は履歴書を丁寧に封筒の中へしまいこむと、案内所を出た。

私が彼に出会ったとき　1

「仕事・・・降ってこないかなぁ」
文字通り、とぼとぼと歩きながら、ため息ばかりが口から出ていく。
さっき出てきた職業案内所の掲示板、実はたくさんの黄色い紙が貼ってあった。仕事が全くないわけじゃない。そう、問題は私ができる職種の求人が非常に少ないという点だ。
黄色い紙は、特殊な技能を必要とする職業。つまりは、魔法が使用可能であること。
とある国際機関の調査によると、世界の人口の大半は魔法が使えるらしい。
けれども私は、残念なことに魔法を使えない。私だけではなくて私の家族もだが。
どうやら、魔法が使える人たちの大部分は、先祖に魔法使いがいたとのこと。うちの先祖には魔法使いがいなかった、というのはもう調査済みなので血筋という点から考えればどうしようもないのだろう。子どものころは、部屋の片づけを瞬時にしてしまう友だちがうらやましかったが、大人になった今となってはもうしょうがないとあきらめている。ないものねだりをいつまでやっていてもしょうがないのだ。
「今時、求人の募集をドアに貼り付けてるところなんてあるわけないだろうし・・・」
また明日も案内所に行くしかないんだろう。正直、あんなやる気のない職員と話すなんてもうイヤなのだが。
私はあることに気づいた。
「・・・お腹すいた」
贅沢はできないけど、食べなくちゃいけない。
その声に答えるかのように漂ってきた、何度も口にしているスー

プ屋のコンソメスープの匂いに誘われて、自然と商店街へ足が向かっていた。

ちょうどいい場所ともいえるところに、スープ屋はある。
左右が肉屋と八百屋。材料を揃えるのに遠い場所まで行かなくてもいい。
小さな店なのでドアを開ければすぐに、スープの入った鍋がいくつも並んでいる。
「こんばんは」
「いらっしゃい」
鍋から顔を上げてにっこりと笑顔で迎えてくれたのは、一人で店を切り盛りしているサリーさんだ。私より１０歳くらい年上らしい。
店の中には、２人の先客がいた。
白いローブを着た（おそらくは）男性と、中学生ぐらいの女の子。女の子は、何だかイライラしているように見えた。
「ええと、それじゃあ・・・コンソメスープをひとつと、それから何だっけ」
「コーンクリームスープをひとつ」
白いローブの男性のあとを、女の子がため息を混じらせたような声で続けた。嫌々来させられましたと顔に書いてある。放っているオーラは、ものすごく刺々しい。
「お代は――ちょうどね」
サリーさんが、銀貨を受け取ってスープを入れた袋を白いローブの男性に渡すと同時に、女の子は走りだすとあっと言う間に角を曲がって見えなくなった。
私は首をかしげ、さあスープを買おうとくるりとサリーさんのほうへ向きなおって――――――なぜか。
「うわあああっ！」
白いローブの男性が、その手元から浮き上がったスープ入りの袋

をあわてて捕獲しようとして失敗している姿と、袋の口から飛びだした熱い液体が自分の服にかかるのを呆然と見ていた。

すみません。ごめんなさい。許してください。

なんだかこちらがかえって気の毒になるくらいな勢いでひれ伏している彼を、私は床に座ったまま見ていた。サリーさんは微妙な表情でこちらを見ている。きっと今の私の表情も微妙なものになっているに違いなかった。

「ええと・・・そんなに気にされなくても大丈夫ですから。スープの温度もその、ええとシェリスカさんの魔法で下げてくださったおかげで火傷もしなくてすみましたし」

「そんなのは当然です・・・」

床に向かってしゃべっているからか、その声は非常に小さかった。

「それは・・・たぶん魔法使いなら当然なんでしょうけど、人間だったらできませんから」

「え？」

シェリスカさんは、下げ続けていた頭を上げた。ぼさぼさの金髪に、そこだけ念入りに手入れしているのではと思わせるほどに深くて綺麗な青い瞳。その瞳がわずかに見開かれている。何か妙なことを口走っただろうかと思いつつ、私は青い瞳を見つめながら付け足した。

「だから、・・・シェリスカさんが魔法使いだったから助かったんですよ」

「あ、ああ、そういうことですか」

シェリスカさんが納得したかのように頷く。

「じゃあ、私はこれで」

たった１０分程度だったが、これ以上ここにいたら営業妨害にな

りそうなので、私はさっさと立ち上がるとコンソメスープ入りの袋を抱え直した。それに、早く帰って服を洗濯しなくちゃいけないし。

「サリーさん、また来ますね」

サリーさんに手を振って、その場を離れようとしたとき、袋を抱えていないほうの腕をがしりと掴まれた。

「服、弁償させてください。・・・魔法じゃどうもできないので」

こちらが振り返るよりもさきにシェリスカさんはそう言ってきた。

さっきよりは大きな声で。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1160q/

アドミラとシェリスカ。～フタリノデアイ～

2011年3月21日21時40分発行